

エッセイ

あれも見たい!これも撮りたい!~私の昆虫撮影記~
(その4 憧れのチョウ)

千葉大学大学院 准教授

野村 昌史 (のむら まさし)

チョウの仲間にも、出逢いたい、撮影したい種類が多い。例えば金属光沢が美しいミドリシジミの仲間や、クモマツマキチョウやウスバキチョウのような高山チョウ等である。でも出現時期や場所が限られる種は、自分の都合を合わせるのが大変で…とは苦しい言い訳だが、彼らはいつか出逢いたい憧れのチョウたちだ。

そんな憧れのチョウのなかで、黄色い縁取りが美しいキペリタテハは、少し標高の高い所に行けば、出逢う機会は多いはずだが、これまで不思議とチャンスがなかった。学生時代に、長野県の湯の丸高原で見つけた個体は、悠然と飛びまわったのち、車の荷物整理をしていたおじさんのお尻でしばらく休息し、その後私の心を見透かすように大空に舞い上がった。そのとき以来、いつかはちゃんと写真を撮りたいと思いつづけていたのだが、私の望みを聞いた友人が、「それじゃあ」と彼のフィールドに案内してくれた。都心からさほど遠くないその場所には、色鮮やかなクジャクチョウや渋い配色のスミナガシなどに混じって、お目当てのキペリタテハも見られた(図-1)。そして人や車も通らない林道でゆったりと飛ぶ姿は、気品にあふれていた。彼らの優雅な飛翔は、今も臉に焼き付いている。また翌春には、川辺で休む越冬を終えた成虫を見ることができた。鮮やかな黄色は色褪せ「シロペリタテハ」となってしまったが、それ以外に翅の痛みはほとんどなく、厳しい冬を乗り切った凜とした姿に感動すら覚えた。ようやく出逢えて写真も撮れたが…いまだに憧れ、また会いに行きたくなるチョウである。

一方、近くに棲んでいるはずなのにに出逢えず、憧れて続けているチョウがいる。幼虫がアブラムシを食べる、ゴイシジミである。子供のときに図鑑を見て以来、ササを見れば探していたが、全然見つからない…ササがあってもアブラムシがいなかったり、アブラムシがついているササを見つけても肝心のチョウがいなかったりと、空振りばかり。このごろはすっかり諦め、探すことすら忘れてしまっていた。ところが昨年夏、親しくなったチョウ好きの学生が突然「ゴイシジミがいますよ」と教えてくれた。そのとき詰まっていたスケジュールを強引にやりくりして、彼の案内で行った所は近くの公園…いつもは刈ってしまうササが、管理の都合で残ったので、今年はアブラムシもチョウも多くなったそうだが…憧れてから45年目にして初めて見たゴイシジミは、どう猛な幼虫からは想像できない、小さく可憐なチョウだった。オスメスのペアが、細かく位置を変えながらも仲良くアブラムシの甘露を舐めている姿は微笑ましく(図-2)、しばらくは撮影するのも忘れて見とれてしまった…今度は幼虫がいるときを狙って、アブラムシを食べるシーンを撮影したいものだ…憧れはまだ続く。

撮影したい昆虫に出会うとき、自分で見つけることもあるが、知り合いに連れて行ってもらうことも多い。今回のチョウもそうだが、虫仲間の情報で、すてきな出会いがあることを実感する。「研究は一人ではできない、ネットワークが大事」というのが私の持論だが、「良い昆虫写真も一人で撮ることはできない」とつくづく思う。



図-1 キペリタテハ



図-2 ゴイシジミ